

文海出版社有限公司 印行

明代滿蒙史料

李朝實錄抄

一冊

譯序

昭和初期，日本對滿蒙研究，至爲旺盛，外務省文化工作部爲促進此種研究，於昭和八年（一九三三）設立滿蒙文化研究部門。該部門包括各方面措施：其中之一，即爲依據李朝實錄及皇明實錄編纂有關滿州及蒙古的記事，以利明朝滿蒙歷史的研究。因整理提供研究滿蒙史不可缺少的史料，實爲學界所強烈要求者。結果，李朝實錄的抄錄工作，委託池內宏博士主持，皇明實錄的抄錄工作，委託內藤虎次郎、羽田亨兩位博士主持。

當時，池內博士就任東京帝國大學文學部教授，其對李朝實錄中滿蒙史料的關心，並非始於此時。博士爲一新進的滿韓史研究家，曾研究元末明初時期韓國與滿洲的關係，早於大正三年（一九一四），李朝實錄四庫本之一——五臺山本實錄完本移送東京帝大附屬圖書館時，即計劃抄錄該實錄，俾助於其研究課題及明朝滿洲史的研究。其後，每年夏季陸續工作，於大正十二年（一九二三）夏天完成太祖至中宗十一代實錄的抄錄工作。同年九月遭遇大震災，貴重的實錄與圖書館俱化爲烏有。其後博士爲繼續研究起見，赴韓時抄錄漢城奎章閣所收藏太白山史庫本實錄，其手中李朝實錄抄稿逐漸增加，目的即在於研究上之方便。

由於池內博士與李朝實錄的特殊關係，外務省文化工作部從事於李朝實錄抄錄工作後，池內博士指定旗田先生爲編者，採取景印太白山本實錄（昭和五年至八年間朝鮮總督府出版）爲底稿，訂定方針收

錄朝鮮及明朝間有關滿洲、蒙古的一切大小記事。池田博士將秘藏「李朝實錄抄」草本交於編者，以便於編成體裁內容俱佳，符合研究目標的完整抄錄。歷經五年，抄錄正副稿本各二十六冊，完成初部工作，惟未能出版。其間，以京都大學爲中心的皇明實錄中滿蒙關係史料抄錄工作，逐年加強推動。

李朝實錄中有關滿蒙的記事，爲研究十四世紀以後滿洲蒙古歷史民族的重要史料，此種史料如經抄錄而不出版，僅對極少數的學者有利用價值，而無法適合於廣大的學術界之要求。是故，池田博士爲出版工作全力奔走，於昭和十七年（一九四一）增補修訂日滿文化協會所編成李朝皇明二實錄抄稿，此修訂工作由深谷敏鐵先生擔任，其目的在於補增原稿的遺漏，同時廣收間接性記事。朝鮮對女真政策事項亦予增補，以充實史料，並依照凡例所表示的方法，與滿洲本體事項加以輕重之分別，對原稿收錄記事，亦採取同一方針。

由池內博士手錄啟發的「李朝實錄抄」草稿，經過他全力指導及兩位編者不斷努力，已近完成階段，並進行印刷準備工作。不幸，日本於昭和二十年（一九四四）戰敗，其出版工作完全停頓。他對學術界之熱忱，毫無酬報，稿本復歸稿本，昭和二十七年（一九五二）十一月，池田博士即逝世。他在世時，縱使臥臥病床，仍經常提起抄錄工作，由此可見他對抄錄工作的責任與感情的深重。

但是，天不遺棄此一工作，至昭和二十八年（一九五二），文部省大學學術局學術課認爲李朝實錄及皇明實錄抄錄的出版，裨益學術界至大，同意補助刊行。關於李朝實錄抄錄的出版工作，經過有關人士與池內博士關係最密切的東京大學文學部會商及推動的結果，刊行「明代滿蒙史料李朝實錄抄」一種。

本抄錄，由池內博士發動出版以來已逾四十餘年，從外務省滿蒙文化研究部門成立日計算已二十餘年，其間歷經艱難，終於完成工作，誠值欣喜。

此書出版之際，衷心感謝已故池內宏博士，並述出版經過，與學術界共深慶賀，同時對文部省大學學術局學術課之協助及昭和八年以來推動本工作之衆多人士致以謝意。

昭和二十九年（一九五三）二月五日

於東京大學文學部東洋史學研究室

旗田巍

三上次男

山本達郎

凡例（譯文）

一、本書據景印太白山史庫本朝鮮李朝實錄所載明代有關滿洲蒙古資料抄錄編纂而成。

二、實錄中明代有關滿洲蒙古的記事，內容廣泛，本書搜羅無遺。至於有關蒙古及蒙古民族的記事，因數量不多，故無須分編特別介紹。

三、凡明代之滿洲對外活動事蹟，社會習俗等記事悉予搜集，如朝鮮李朝和明朝對於女真民族的政治、軍事、經濟上之政策、遼東和朝鮮的交涉事項亦均包括在內。其中凡專指朝鮮本身的記事於記事前冠以（參）字，較小鉛字排印，以資參考。至有關滿洲本身的記事，則以較大鉛字排印，便於識別。

四、另備索引一卷，以便檢索人名、地名。

五、原書異字俗字頗多，其體裁亦不整齊，因係使用新舊不同鉛字故，實無特別意義，今依常識的處理如下：

1. 俗字異字多改爲正字，但亦有依原書舊字改正者

2. 正俗二字體併用時，原則上一律用正字，如以潛字統一代替潛、涶、潛、涶等字是，但亦有原書舊字卽爲正字者。

3. 今仍使用之俗字異字如贅、歟等仍繼續使用，但亦有例外。

六、原書明顯的誤字、脫字、倒錯字依然使用，但在字旁註明。不詳者字傍註（マ），以示疑問。
七、原書記事的干支有三種形式

1. ○干支〔本文〕

表示原書記事首有干支。

2. 干支○〔本支〕

表示原書記事首無干支，悉以前文記事之干支爲準。

3. 干支（先行）——干支（後續）○〔本文〕

原書記事首無干支，但前後二千支間記事有日次間隔者，即用此式表示，使儘量與原書體裁相同。

4. 相同干支下有二條記事時，原則上干支冠於前項記事之首，不再重複。

八、本書由山根幸夫、松村潤二人校訂。

序

昭和の初期は、わが國における滿蒙研究が著しく盛になつた時期であるが、外務省文化事業部においてもこれを助長するため、昭和八年春、新らたに滿蒙文化研究事業をおこした。この事業は種々の方面から取り行われることになり、その一つとして李朝實錄及び皇明實錄から滿洲・蒙古に關する記事を抄出・編纂し、明代滿蒙史の研究に寄與するのが取りあげられた。滿蒙史研究に必要缺くべからざる史料が、整理された形で提供される事は、當時の學界の強く要望するところであつたからである。こうして李朝實錄抄錄の事は池内宏博士に、皇明實錄抄錄の事業は内藤虎次郎・羽田亨兩博士に托

された。

當時、東京帝國大學文學部教授の職にあつた池内博士が、李朝實錄中の滿蒙關係の史料に深い關心を示されたのは、この時に始まるものではなかつた。古く大正三年の初、李朝實錄の四庫本の一つである五台山本實錄の完本が東京帝國大學附屬圖書館に移されると、新進の滿鮮史研究家として、たまたま元末明初の半島と滿洲との關係について考察を進めておられた博士は、當面の研究課題及び他日の明朝一代を通ずる滿洲史の攷究に役立てようとして李朝實錄の抄録を思ひ立ち、それ以後、毎夏その業を續け、大正十二年の夏には、ようやく太祖から中宗まで十一代の實錄の抄録を終つた。たまたま同年九月に起つた大震災は、圖書館とともに貴重なる實錄を

も烏有に歸せしめたが、博士はなおも調査研究のため渡鮮の途次、京城の奎章閣收藏の太白山史庫本の實錄について、抄出をつゞけられた。こうして博士の手もとの李朝實錄抄はしだいに量を増していつたのである。けれどもこれが、あくまで博士の研究の便宜を目標としての仕事であつたことは當然である。

博士と李朝實錄とのつながりはこのようであつたので、外務省文化事業部において、新らたに李朝實錄抄錄の事業がおこると、博士は旗田を選んで編者に充て、底本にはさきに昭和五年から八年にわたり、朝鮮總督府の事業として景印出版せられた景印太白山本實錄を用い、滿洲・蒙古に關する記載は、朝鮮・明雙方に互つて細大もらさず收錄する方針を定めるとと

もに、自ら筐底に藏された「李朝實錄抄」の草本を編纂に預け、之を参考して體裁内容ともに新事業の目的に副うところの完全な抄録を編成せしめることゝした。こうして、事業開始の後ち五年、正副の稿本各々二十六冊が作製され、所期の業は一應の完了を見るに至つたのである。たゞ出版の事はこの際、はつに行われなかつた。なおこの間、皇明實錄中の滿蒙關係史料の抄録も、京都大學を中心として、著々として進行しつゝあつた。

李朝實錄中の滿蒙關係の記事は、十四世紀以降の滿洲・蒙古方面の歴史・民族の研究に極めて重要な史料であることは云うまでもないが、これが抄録にとゞまり出版をみなければ、史料は極めて一部の學者に利用されるに終り、廣く學界の要望

に答えることはできぬ。故に博士はその後、銳意、これが出版に意を注がれたので、ついに昭和十七年、日滿文化協會において、すでに編成されていた李朝皇明兩實錄抄の稿本に就いて、さらに周到な増補修正を施すのに併せて、これが全編の出版の事も企てられるに至つた。そうしてこの度の稿本李朝實錄抄の増補修正には、新らたに深谷敏鐵氏が當ることゝなつた。増修の要旨は、力めて前稿の遺漏を補うと共に、内容がやゝ間接的である記事も、むしろ廣きに從つてなるべく之を收録することであつた。同時に朝鮮の對女眞策に本づく朝鮮自體に關する事項も、またこの趣旨のもとに増補されたが、この場合においては、凡例に示したような方法に依つて、滿洲本位の事項との間に輕重を附し、すでに前稿に收録された同様の記

事に對しても、新らたにこの方針が適用された。

こうして古く池内博士の手録に端を發した「李朝實錄抄」の稿本は、その後、博士の獻身的な指導と兩編纂者の相次ぐ努力によつてほど完全になり、一方、全卷印刷の準備もすゝめられた。しかるに昭和二十年夏の日本の敗戦は、この出版事業の根底を一舉にくつがえした。博士の學界を益せんとする熱意は、何ら酬いられることなく、稿本は再び稿本のまゝ藏せられることゝなり、しかも池内博士は、昭和二十七年十一月、ついに道山に歸されたのである。博士が病床にあつて常に本抄録のことを口にして居られたのを見ても、如何に博士がこれに深い責任と愛情を感じて居られたか、思い半ばに過ぎるものがある。

しかるに、天はこの事業を見すてず、昭和二十八年に至ると、文部省大學學術局學術課は李朝實錄抄録と、別に行われた皇明實錄抄録の出版が、共に學界を益するところ極めて大きいことを認め、兩者の出版を補助することを許した。よつて李朝實錄抄録に關しては、池内博士と最も關係の深い東京大學文學部内に關係者相會し、銳意進捗に力めた結果、ここに「明代滿蒙史料李朝實錄抄」の刊行を見るに至つたのである。

惟うに、この舉が池内博士によつて志されてからすでに四十數年、外務省滿蒙文化研究事業の發足の日より數えても二十餘年、その間、荆棘の道を歩んできた觀はあるけれども、いまここに最後の行程に達し得たことは、まことに喜びにたえない。

われわれはこの度の上梓を、心からなる感謝もて、故池内宏博士に告げると共に、この意義ある出版の次第を述べて學界と喜びを頌ちたいと思う。同時に、本出版に對し、深い理解と援助を與えられた文部省大學學術局學術課、ならびに昭和八年いらい、本事業に關係し、これを推進された多くの方々に、大なる謝意を表するものである。

昭和二十九年二月五日

東京大學文學部東洋史學研究室に於いて

旗 田 巍

三 上 次 男

山 本 達 郎

凡 例

一本書は景印太白山史庫本李朝實錄に就いて、明代の滿洲並に蒙古に關する記載を抄録編纂したものである。

一明代の滿洲蒙古に關する同實錄の記事は、廣きに從つて、概ね細大漏らさなかつた。たゞし蒙古及び蒙古民族に關する記事は極めて少いので特に編を分つことをしない。

一凡そ明代の滿洲及び其の周邊に於ける滿洲民族の活動事蹟、社會習俗等を傳える記事は、これを網羅し、交うるに李朝と明朝の女眞民族に對する政治・軍事・經濟上の施策と施設とを傳える記事、並に遼東と朝鮮との交渉に關する事項を以てした。そうしてこのような事項のうち、専ら朝鮮自體に關するものは、特に首に〔參〕字を冠して參考に資する意を示し、且つ活字の大きさを落して滿洲本位の記事との區

別を明かにした。

一索引一卷を添えて人名地名の検索に便した。

一原本異字・俗字頗る多く、其の體も一二に止まらぬが、それは専ら印成の際新舊の鑄字を混淆併用した事實に本づくものであつて、格別重きを置くに當らぬと考えられるから、力めて常識的に處理した。

イ俗字異字の多くは、正字に改めた。たゞし時に原本の舊に従つたものもある。

ロ正俗二體以上を併用するものは、原則として正字を以て統一貫した。潜・潛・潛・潛を潜で統一した如き。たゞし原本の舊を存したのものもある。

ハ俗字・異字を以て一貫しているものは、原則としてこれを蹈襲した。贅・欸の如き。たゞし例外もある。

一原本に於いて、明かに誤字・脱字・衍字・倒錯と認められるものは、そのま

まこれを蹈襲し、傍にこれが校訂正誤を施した。たゞそれを疑問の體に取り扱かつたのは編者の慎重と謙讓から、獨斷と見られることを避けたかつたからである。なお不用意の誤植か、意識した慣用（普通を含む）か、にわかに決し難いものには傍に（マ、）を附した。

一 記事の係けられた干支（日次）を掲出するのに、次の三様の區別を設けて、正しく原本の體を傳えるように力めた。

イ○干支〔本文〕

これは原本のまゝである。即ち原本に於いて、記事の首に干支を掲出してゐる場合である。

ロ干支○〔本文〕

これは原本に於いて、記事の首に干支を掲出してはいないが、その係けられた干支が明瞭な場合である。即ち先行する記事の首に掲出してある干支と、後續する記事の干支との間に、日次の間隙の